今こそ伝えたい歌舞伎町ルネッサンスの魂

—犯罪を許さないまちづくりの実践と市民の役割—

城(じょう)　克(まさる)*

はじめに

ご紹介いただきました歌舞伎町商店街の城と申します。

自分は商店街の事務局長という肩書きを背負っております。何をやっているかといいますと、最近は歌舞伎町でいろんなことをやっているものですから、歌舞伎町の話を聞かせてくださいということで、あちこちへ出向いて、暴力団の話とか性風俗営業の話とか、実態をお話しさせていただいて、「歌舞伎町というのはこんなに本物の大人のまちなんですよ。楽しいところですよ」ということで、来街者の方を多く募ろうということを目的にやっております。

反面、内に向かっては安心安全なまちづくりということがあるのですが、まちの人たちとどう連携してやっていくかというバランサー、行政との間の関係を一手に引き受けてやらせていただいているというのが現状でございます。

安心安全のまちづくりというのは、新宿から京王線で10分ぐらいのところに明大前商店街というところがありますが、実はそこの理事長さんから、「安心安全のまちづくりというのは、おれが日本で一番最初に言いだしたんだ。これを使うんだったら少しパテント料をもらわないとやっていけないよ」というようなお話がありました。これはいま全国的に広まっているようですが、安心安全っていったい何だろうかということで突き進んでまいりましたら、どんどん間口が広くなってしまったのです。実はレジュメに「歌舞伎町ルネッサンス」などという大それた名前が書いてあります。これをやりだしたのは一昨年からなのですが、次から次へと課題が出てきて、課題を解決すればまた次の問題が出てくる。こんなふうに広がっていくとは思いもしませんでした。単純に始めたものが、いまこんな状態になっているということをお話しさせていただければと思います。

さっそく本題に入るのですが、皆さんに歌舞伎町のことを知っていただくために、まず歌舞伎町の生い立ちとか現状をちょっとご説明させていただきたいと思います。

●歌舞伎町の概略

歌舞伎町というのはＪＲ新宿駅の東北側600

*歌舞伎町商店街振興組合事務局長

メートル四方に囲まれたエリアです。中央にはシネシティ広場と勝手に名づけた映画街があります。後ほどちょっとご説明しますけれども、この映画街は全部で14のスクリーンと一つの劇場があり、客席数が約1万です。こんなに大きな映画街があるというのを知りまして、われわれが歌舞伎町をＰＲするときに、ここをプラスの意味での基本にしようというふうに考えたエリアでございます。

新宿駅は、ＪＲと私鉄を合わせて1日に350万人の乗降客があります。ただし小田急線を降りてＪＲに乗りかえると2とカウントされてしまうので、350万の半分ぐらいが実質の人数かと思うのですが、なかなか統計の数字が出ません。駅の東北側にあるのがラブホテル街で、昔は置屋さんのまちだったところです。東南側はゴールデン街といいますが、ここは昔の青線です。ですから、いまでも長屋のような建物の1階に、二つも三つもバーが軒を並べております。2階に上ると全部つながっていて、昔何とかの間と呼ばれていたところがそのまま残っています。いまここが見直されておりまして、けっこうお客さんも来られているようです。北側の置屋さんのまち、いわゆる三業種と呼ばれていたところが、いまはラブホテル街になっているというのが歌舞伎町のエリアでございます。

歌舞伎町の中にいったいどれぐらいのお店があるかというと、飲食店が約3,800。600メートル四方の中に3,800ですから相当な密度だと思います。映画館が14、ホテル、旅館が83、ソープランドが8。一丁目、二丁目と分けてあるのは、一丁目と二丁目ではちょっと業態が違うものですから分けさせていただいています。約3,800の飲食店のうち、いわゆる風適法で規制を受けるところのお店はどれぐらいあるかというと、合わせて3,500。つまりほとんどが風俗営業であったり、性風俗関連特殊営業であったり、深夜酒類提供店であったりというところになります。ちなみにホストクラブはどこに入るかというと、風俗営業です。ここはいま問題となっているところですので、後で詳しくお話をしようと思います。

もう一つ問題になっているのがカラオケの客引きなのです。歌舞伎町の場合、深夜酒類というのは25時以降の話なのですが、25時以降酒を出さないカラオケ屋なんてないのですね。ところが、カラオケ店は一つのボックスが9.2平米ないものですから、深夜酒類の届け出ができないのです。これは暗黙の了解上そうなってしまっているのですが、お酒を出しているということは、本来は深夜酒類提供店ということで風適法に規制される業態なのです。ということは客引きを出してはいけないのです。

数ヵ月ほど前まではこの概念はなくて、カラオケは風俗営業の規制を受けないから客引きを出してもいいというのが一般的だったのです。ところが、客引きの迷惑行為が増えてきたものですから、歌舞伎町にはカラオケ専業店が34ありますが、それを全部集めて防犯協力会という自主的な組織をつくってもらって、そこで客引きの自主規制をしてもらってトータルで客引きの実数を半分に減らしました。カラオケの客引きは、「歌舞伎町ルネッサンス」と書いた黄色いたすきをして、身分を明らかにしてやるようにしてもらっています。東京都には迷惑防止条例というのがあって、悪質な客引き行為とかつきまといは禁止されておりますから、これの処罰の対象になるので、そうした目立つ格好をすれば悪質なことはしにくいだろう、適法に客引きをしていればいいでしょうということでやっていたのです。

ところが、暴力団に対してみかじめ料不払い活動というのを始めたら、けっこう効きめがありまして、お金の入り口がだいぶ締まってきました。そうしたらいろんなところに反作用が起きました。暴力団の裏についている弁護士さんに、カラオケの客引きに関して、「おまえらは違法な営業をしているのになぜ客引きを出せるのだ」というところを突かれてしまったのです。確かに深夜酒類提供店の届け出をしていないから、深夜1時以降、酒を出して客引きをするということは違法行為になります。おまえら暴力団は存在自体が違法なのになぜそんな細かいことを突いてくるんだということですが、一つの

ことをやりだすといろんな影響が出てきてしまいます。

いまカラオケの客引きは1日2回になって、深夜の1時には掃除をしています。朝ホストが汚していったゴミも全部掃除をしたりして、自分たちが模範になってマナーよく客引きをやるんだということで動いておりますけれども、本来は違法というか、風適法の解釈の仕方一つでいろんな問題点が出てきてしまっているということが現実問題としてございます。

ただ、歌舞伎町は東京の新宿区にあるのですが、東京都の23区というのがまた特殊な組織でございまして、名古屋市とか大阪市の区とは全然違います。昔の東京市を平等に分けるために23に分けてしまったというだけの話なのです。ですから、ほとんど区に権限がないのです。区長は公選で、独自の税収もありますが、ほとんど東京都の窓口、出先機関でしかないにもかかわらず、役人の人たちは、自分たちの新宿区だと言い張るような、さも権限を持っているかのようにふるまっているものですから、新宿区との間でバッティングをしてしまう話になるのです。そのへんの話も後ほどふれさせていただきたいと思います。

1日の来街者は25万人です。これは自分たちは当たり前だと思っていました。先日名古屋の県警の方のお話を聞いたら、愛知万博のときの1日の最高入場者数が25万人だったということですから、歌舞伎町が1日25万ということは毎日万博状態なのです。とんでもない数字かと思いましたら、たまたまある歩道の拡幅工事をすることになったのに伴って、先日、新宿署の交通課が来街者調査をやりました。そうしたら、一丁目、二丁目の600メートル四方の外側から中に入る人が、平均で17万人だそうです。その外周の道路に面しているビルに入っていったお客さんはカウントしていません。それで17万人ですから、25万というのもあながち嘘の数字ではないということで、とんでもない数の人たちが1日に押し寄せるのです。

●歌舞伎町の歴史

今度は歌舞伎町の歴史ですが、歌舞伎町というのは戦後のまちです。戦争で焼け野原になっていたのを、戦後、当時の町会長さんが1区画をおおむね30坪に区切って区画整理を行われたのがスタートです。ここに商店をつくったのがいまの商店街振興組合の一番最初の姿でございます。鈴木喜兵衛さんという当時の町会長さんがすごい方で、そのときにここを大衆文化の発信基地にしようということを考えられました。大衆文化って何だろうというときに、当時菊座という歌舞伎劇場があったらしいのですが、これを誘致しようということで奔走されました。そのときに、当時は角筈北町会といっていたのを、歌舞伎座を誘致するのだから歌舞伎町に変えてしまえということで、まず名前だけ先に歌舞伎町とつけたのが歌舞伎町の始まりです。

私どもは歌舞伎町を何とか活性化しようということで活性化プロジェクトをつくってＰＲ活動をしているのですが、そのメンバーである東京ギンガ堂という劇団の主宰者の方が、歌舞伎町をつくったという鈴木喜兵衛さんをモチーフにした演劇をつくりまして、コマ劇場の地下にシアターアトルという小さな劇場があるのですが、昨年そこで公演をしました。歌舞伎町には一つの劇になるぐらいのストーリーがございます。それがシアターアトルという劇場であったときに、コマ劇場の前にある広場と劇場とを結んで、二元性のある劇の公演だということでＰＲをしてやりました。消防署にも協力していただいて消防車を大道具として出していただいたり、行政の方の力も借りながらＰＲをさせてい

ただきました。

当時、区画整理事業をして大規模な娯楽施設を誘致しよう、歌舞伎座を引っ張ってこようとした。ところが、戦後ですから、資金が凍結になってしまうとか、大規模な建築はだめだとかいうことになって大きな劇場の誘致ができませんでした。それで、残った土地で産業文化博覧会といういまでいう万博のようなものを開こうとして、大失敗に終わったということがございました。大失敗に終わったため、当時パビリオンとして建設途中だったものがそのままになってしまったものですから、そこにコマ劇場をつくったり、あるいはミラノ座が進出してきて、歌舞伎町の大衆娯楽である演劇と映画がここで初めてスタートしたということになります。ちなみにコマ劇場ができたのは昭和31年です。

どこでもそうだと思うのですが、歌舞伎町も歌舞伎町といえばということでいつもアーチが出てきます。このアーチも30年代につくったものです。当時はダンスホール、歌声喫茶といったのが中心でした。ところが、50年代に入るといろいろな繁華街的な要素がどんどん入り込んできてしまったのです。一つ象徴的なのがキャッチバーです。キャッチバーというのはぼったくりのバーですが、そこにお客さんとして入ってきた大学生が、逃げられなくなってしまってビルの屋上から飛び降りたという事件があって、いわゆる性風俗あるいは繁華街としての悪い面が出てきてしまったのが50年代からです。

60年代に入ると風営法が改正されました。改正というといいことのように思えるのですが、法律というのは全部そうで、書いてないことはいいのです。何々をしてはならないと、法律の条文では禁止事項ばかり書いてあるものですから、禁止事項にあたらないことはやってもいいというような解釈になっているのです。したがって、法のすき間をついてくるような悪質な性風俗がはんらんしていったのがこの時代でございます。

●歌舞伎町の実態をあらわにしたビル火災事故

象徴的なのは、平成13年9月に、44名もの大勢の方を失ってしまった火災事故がございました。これが私どものルネッサンスのスタートの原点になるのです。というのは、ご覧になった方もいらっしゃいますでしょうか。この明星ビルというのは建坪で30坪ない、20坪ぐらいの5階建のペンシルビルでした。1階が風俗モリオアダジオでした。2階がポーカーヘイゲン、3階が個室レストランと、全部違法営業だったのです。違法営業を許していたということと、その中に44人ものお客さんが入っていた、どこに入っていたのだろうかというようなイメージでした。

実際の火事というのは、はたから見るとボヤです。窓から煙がモクモクと出るぐらいで、炎を確認したことはありませんでした。そんなボヤで済んでよかったと思っていたら、中で44人のお客様が亡くなっていた。そこで暴露されてしまったのは、歌舞伎町ではそんな小さな店の違法営業を受け入れてしまっていたということが一つ。それからもう一つは、お客さんが44人亡くなったということは、中に60人ぐらいいたわけですが、避難口が全然なかったのです。言い方はおかしいのですが、そういう消防法的な不備がいっぱいあったということがいっぺんに外に向かってばれてしまった。歌舞伎町が怖いまちの代名詞になってしまったのはこの事故以来です。

それから、ビルのテナントとオーナーとの契約形態が複雑になっておりまして、いまだにその補償問題がすべて片付いたわけではないのです。ビルの持ち主が誰だかわからない。ビルのオーナーと営業をしていたお店との契約の間に三つも四つも仲介業者が入っていたのです。その仲介業者というのは何もしていません。ただ不動産の仲介です。オーナーと契約して自分がまた別なところにそれを貸し付ける。借り受けたところもまた不動産屋を一つ入れてというように、間に三つも四つも不動産屋さんが入っていて、最終的に末端ではビルのオーナーの元の契約の3倍ぐらいの家賃になっていました。ただでさえ固定資産税が高いまちですから、ビルのテナント料が高いにもかかわらず、その3倍

の家賃を払ってやっていける商売といったら違法な営業しかあり得なかったのですが、そんな構図がここで出てきてしまいました。

もう一つ言えるのは、商店街の方がいらっしゃいましたら、私ども歌舞伎町も同じですよということだと思うのですが、商店街の人たちは自分たちもこの火災事件の被害者だという感覚を持っていたのです。つまり歌舞伎町の悪いところがこの事故によって露出してしまったという被害者意識を持っている人が9割でした。何ということはない、そういう違法営業を許していたこととか、それを規制しなかったこととかを考えると加害者なのですが、加害者という意識を持っているまちの人は1人もいませんでした。ですから、その事故に対してどうしていこうかといったときに、マイナスのイメージを取り戻そうということしか当時はみんな考えていませんでした。悪いものが入ってきたってそれは当たり前なんだよ、それでまちは成り立っているんだよ、という感覚が当時は横行していました。被害者意識があったものですから、事故の後、最初にやったのは、まちは悪いんじゃないんだ、いいんだよというＰＲから始めました。

●歌舞伎町治安対策情報連絡会の発足

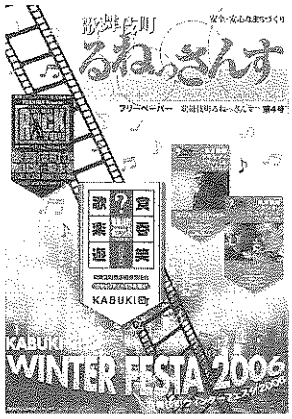
先ほどの44名の犠牲者を出してしまった事故をきっかけに、失われた歌舞伎町ブランドを回復するためのＰＲイベントを始めたのがきっかけで、それが将来的にルネッサンスに発展していくわけですけれども、その間にやったこととというのは、先ほどお話ししましたように、とにかくばかでかいものを誘致すれば新聞が取り上げてくれて、歌舞伎町とのミスマッチをうたってくれれば歌舞伎町がＰＲできるのではないかと思いまして、映画の興行会社の方の協力を得て、ハリウッドからスターを呼んでイベントをやったり、映画にちなんだイベントをコマ劇場の前の広場させていただいたりということで対応してまいりました。

それがルネッサンス宣言につながってくるのですが、間に一つ話があります。それは平成16年になりますが、当時竹花さんという広島県警本部長でおられた警察庁のキャリアの方が、東京都の治安対策担当として副知事で入ってこられました。石原都知事が引っ張ってきたのですが、何を仕事とするかというと、失われた東京の治安を回復するんだと。東京の治安を回復するといってもなかなか目に訴えられないので、まず歌舞伎町の治安対策をすれば東京の治安対策として広く認識されるだろうということで、歌舞伎町という固有名詞を出して対策が講じられるようになるきっかけになったのです。

実は当時私がこの竹花副知事に呼ばれまして、歌舞伎町をこれから治安対策強化のモデル地区にしてやっていくのでみんなと話をさせてくれないかという依頼を受けました。それで、竹花さんを私どもの振興組合の事務局にお招きして、組合役員の方に集まってもらって、まちの実態、それこそ44名の死亡事故を起こしてしまったビル火災の問題、それからそこでもって顕在化してしまったオーナーとテナントとの契約関係、それから違法な営業にはどんな形態があるか、それによってどれだけ迷惑しているかというようなことを竹花さんに訴えました。

そのときにアドバイスをいただいたことが、治安対策は総合行政である。平たくいいますと、例えば路上の自転車、バイクですけれども、放置自転車は私どもでいうと区の対応です。50cc以上のバイクは警察の縄張りです。そうすると、バイクと自転車が一緒に止っていると、われわれにしてみればまったく同じ状態なのですが、バイクは警察の交通課へ行かなくてはいけないし、自転車は新宿区の自転車対策課という環境保全課のほうへ訴えなくてはいけない。同じことをやるのになぜ窓口が幾つもあるのというようなことをわれわれも感じていたのですが、そのときに、治安対策をするならば総合行政でやらなければできないんだ、というアドバイスをいただいた。たまたまその席に新宿区の区長も呼んでいたものですから、竹花さんが「ちょうどいい人がいる。区長さん、あなたが連絡協議会の会長になって、治安対策のための情報交換会を開きなさい」と言われてさっそく開いたのが、歌舞伎町治安対策情報連絡会という勝手な

名前をつけまして、警察の署長さん以下各課長さん、消防の署長さん、各課長さん、区の担当者の方、それから私ども地元、あとは入国管理事務所。この入国管理事務所というのは法務省ですから、彼らは国家公務員なのです。集まっているほかのメンバーはみんな地方公務員の人たちなので、「おれたちは霞ヶ関なんだからこの会議には出られない、オブザーバーにしろ」とか、要するにいろんな役人の人たちの縄張りがあるらしくて、入国管理事務所を入れるのに大変苦労したのですけれども、とにかくみんなで何をやろうということではなくて、自分たちはいまこういうことをやっていますということをお互いに知り合えるだけでも、治安問題の解決に向けた対策が講じられるのではないか、何かアイデアがひねり出せるのはないかというので始めたのが連絡協議会です。それがルネッサンス推進協議会に発展していったという経緯がございます。



●歌舞伎ルネッサンス協議会が“治安対策は総合行政で”の実践の場として機能

ルネッサンス推進協議会を始めるにあたり、私どものほうで「ルネッサンス宣言」なるものをこしらえました。これがいま錦の御旗になっております。その中の一つですが、「健全な歓楽街」という表現をさせてもらいました。健全ということと歓楽街というのは相反してしまうのですが、歌舞伎町というのは昔から性風俗的な風俗営業が多いですから、それを否定をせずかつ合法的にということで、「健全な歓楽街」という表現をさせてもらいました。一番最初に鈴木喜兵衛さんという方が歌舞伎町を区画整理して始めたときには、「道義的繁華街」という表現をされたのです。それをちょっともじって「健全な歓楽街」という表現をさせていただいております。

中心市街地活性化法とか都市再生本部をつくってうんぬんとか、国がいろいろ動いたのです。これは中心市街地つまり駅周辺、都市の中心部における市街地、特に商店街が疲弊しているので、それを活性化しようという国の動き、それから犯罪対策閣僚会議等にも見られますように、都市部における犯罪対策に国のほうが動きだしました。それでいろんな法律ができてきて助成金、補助金等々が出ているわけですが、それがあったから動いたということではなくて、私どもの火災事故以来取り組んできた方向性が、全部国の定める方向性とマッチしていたということと、もう一つは、歌舞伎町はよくも悪くも歌舞伎町なのです。歌舞伎町という名前だけでちょっと暗いとか怖いとかいうイメージを与えています。繁華街というよりもむしろそういう歓楽街的な要素が出ているという中で、歌舞伎町対策という単語を使いさえすれば繁華街対策だといわれるようになってしまいました。当時は小泉首相だったのですが、所信表明演説の中に歌舞伎町の治安対策うんぬんと固有名詞が出てしまったりして、国も都も全部歌舞伎町のほうに向いていただいたということは、われわれにとっては追い風だったのです。自分たちでやろうとしてきたことが、いままでは新宿警察署という対応でした。それが警視庁になり、東京都の副知事でおられた竹花さんは、そこを勇退された後、警察庁に戻って生活安全局長になられました。警察庁というのは国の官僚です。

警察の組織というのも私にはよくわかりませんが、東京都公安委員会の下にあって、検察庁の下にある。警視庁と大阪府警とどう違うのかとか、よくわからない。いろんな構造がありますけれども、警察のもともとの本体が警察庁ですが、その警察庁に竹花さんが戻られたということもあって、全面的な警察のバックアップを得られるようになりました。

それで、ルネッサンス推進協議会のメンバーに国土交通省、総務省などにも入っていただきました。といっても、そこに参加していただいている方々は課長補佐クラスの方です。霞ヶ関の課長補佐というのは30代ですがバリバリなのです。まだ管理職になっていませんから、自由な発言ができる方々なのですね。まさか国交省の役人の方の発言とは思えないような奇抜なアイデアをどんどん出してくれます。われわれにとってはそれはものすごくありがたいのですが、例えば先日のルネッサンス推進協議会の席上でまちづくりの話をしましたところ、伊藤滋さんという建築学会の大御所の方が、「ビルを一つ建設するときに、5階、6階のペンシルビルを建てて、そのオーナーは利益取れるの？」という話をされました。つまり3階ぐらいまでだったら建てるコストと収益が見合うのです。例えば2億円で建てて月々の家賃を幾ら取ると10年で返済できるという計算が成り立つのです。ところが、5階、6階になると、建築費ばかり高くなって収支のバランスが取れないのです。

そうすると、地元の土地持ちの人たちはどうしたらいいか。自分のところだけではビルが小さすぎる。要するに一番最初に30坪の区画に割ったところがいまだに残っているわけです。その30坪の区画のところに5階建、6階建のビルを建てて、階段をつけてエレベーターをつけてといったら、共用スペースばかりで収益スペースがなくなってしまうので、せいぜい3階が精いっぱいなのです。でも、3階建のビルを改装して新しく耐震構造のちゃんとしたものをつくりたくても、3階建ではペイできないのです。ですから、例えば5階建のビルの許容範囲があるならば、その権利をもらって3階建の飲食店ビルにして、六本木ヒルズのようなセキュリティのパーフェクトなマンションを建ててその権利を分割するのです。そうすれば、オーナーの方一人ひとりは立て替えを考えやすくなってスタートをするのではないか。国交省のお役人の方は、「それグッドアイデア、上手にやりなよ」というように、私どもでは想像つかないようなことを考えてくれるセクションになっています。

警察庁でいうと、やはり生活安全局の課長補佐クラスの方ですが、いま私どものほうへ投げかけていただいているのは特区です。経済特区とか構造改革特区とかいろんな特区がありますから、「歌舞伎町さん、ちょっと特区を考えてみたらどう？　特区って何でもありだから、好きなことを言ってくれればいいよ」と言われて、すっと思いついて、「24時間特区といって、歌舞伎町に限っては24時間すべて性風俗も含めて営業してもいいようなまちにできませんか」と言ったら、「いまの現状ではとてもできないよ。ただし、特区というのは何でもありなんだから、やろうと思えばできる。もし将来24時間特区を目指すのであれば、それなりの対策をいまから講じていけばできなくない話だよ」と言われる。

もう一つは入国管理局の話なのですが、就労特区。いま不法就労の外国人がけっこう来ていますけれども、彼らはコストが安いから使うほうとしては使いたいのです。しかし、不法就労を使っていることによって違法なことになりかねませんので、そのへんをクリアするために、歌舞伎町に限っては外国人の就労者を認めていいような特区になれないかと思いましたら、これも別にだめだということではないらしいのです。ただ、いまの現状ではそういうチェック機能がないからできないということなのです。

蛇足が多くなってしまいますけれども、不法就労と外国人登録というのは法律上別なのだそうです。だから、不法滞在の人が新宿区の区役所の外国人登録の窓口へ行って、「私は不法滞在なんだけれど外国人登録をしたい」と言えば、「滞留資格なし」と入った外国人登録証が出てしまうのです。皆さん方のところでも、お店をやっていらっしゃる方は、外国人を雇用するときには登録証しか見ていないのですが、その登録証の中には「滞在資格なし」と書いたのが半分ぐらいあるのです。こんなおかしな話はないと思うのですね。警察の窓口だったら不法滞在として処罰を受けるのに、区役所の窓口は外国人登録証を発行するだけが仕事なのだから、そこは不法滞在であろうと合法な滞在であろうと区別しないのです。新宿区がそういうデータをフィー

ドバックしてくれれば、不法滞在者を全部チェックアウトできるはずなのですけれども、してくれません。行政の縦割りにはそんな不思議なところもあります。

歌舞伎町ルネッサンスで私は毎日何をやっているかというと、行政に首を突っ込んだり警察に首を突っ込んだり、朝から晩まで椅子には座らないで、警察へ行き、霞ヶ関へ行き、桜田門へ行き、区役所へ行き、東京都へ行きと飛び歩いて、何とか集めた情報を1本の横糸で通そうという仕事を担っているのですが、そんな不思議な話がいっぱいございます。

ただ、歌舞伎町ルネッサンスの中で私どもにとって一番大きかったことは、いろんな行政の方々が歌舞伎町に目を向けてくださって、われわれの話を聞いてくれて、将来の方向性について絶対にできないことはノーと言ってくれます。そんな夢物語はできないよというのは最初からノーと言ってくれますから、やっても意味のないことをやらなくてすんでいます。もう一つは、こういうふうにすれば城さんの夢がかなうよということをアドバイスしてくれます。これは非常に大きな効果だと思います。

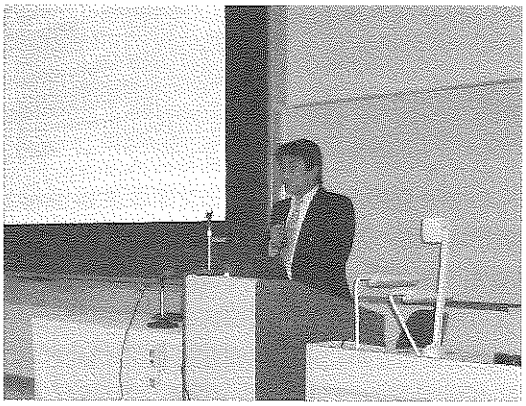
こういうことができるようになったのは、最初に申し上げましたように、ルネッサンス推進協議会の最初のスタートラインのところで連絡協議会をつくって縦割りの行政を一つにまとめていただく作業ができたからだということになります。このときおさまりのいい会長に地元の区長さんになっていただいた。新宿区の区長さんというのは女性なのです。歌舞伎町の3,800分の3,500が風適法に規制される業態だというお話をさせていただきましたが、ホストクラブとかキャバクラとかと言った瞬間になしなのです。女性だからなのでしょうけれども、私どもにしてみればホストクラブという業種はありなのです。ただ彼らが暴力団とつながっていたり違法な行為をしていることがノーなのです。

歌舞伎町には200のホストクラブがあります。私どものところでみかじめ料不払い運動を始めたものですから、有名なホストクラブの「クラブ愛」というところの社長さんが、自分たちは健全なホストクラブであり、将来的にもホストクラブという名前を何とか認知させていきたいというモチベーションのある方ですから、暴力団とかかわっていないホストクラブだけ集めました。違法な営業をしないで合法に営業する。合法に営業するということは、深夜1時以降は営業しない、客引きを出さない、それから暴力団にみかじめ料を払わない。この三つを守れるところはこの指とまれと言ったら、200のうち40しか集まりませんでした。その40の店を私と新宿署の組対係の若いお巡りさんとで面接して一つずつチェックしていったら21になったのですが、合法的な適法営業をしているホストクラブは200のうち21しかなかったという実態です。あとは全部暴力団にみかじめ料を払っていました。

中には保健所の許可を取っていない店もありました。飲食店が多いまちですから、防犯より先にまちの安全で考えなくてはいけないのは食の安全なのです。ところが、まちの人間は、それは絶対みんな守っているという思いでいたのです。保健所で許可を取ってくるのは当たり前、それだから営業できるんだよと考えておりましたけれども、一部ホストクラブはその許可すら取っていませんでした。ということは、そこで不二家とか雪印のような食中毒事件が何か起こってしまったらまち自体がアウトになってしまいますので、それはこれから気をつけなくてはいけないなと胆に銘じております。

もう一つは、営業的に青少年の雇用とか青少年犯罪対策です。つまり青少年を深夜客として入れない、酒を提供しない、雇用しない。これは警察の取り締まりの中で最初の突破口になるところなのです。ですから、違法店もこれだけは守っています。暴力団とつながって違法営業をしていたとしても、それは営業自体が違法であって、例えば深夜接客飲食をさせていたとか、売春的な行為をしていたとかいうことがあったとしても、そこでは未成年者の雇用とか飲酒をさせていません。そこを突破口にして店が挙げられてしまいますから、青少年の犯罪、未成年の雇用うんぬんということと食の安全というの

は絶対守らなければいけないことだし、違法店でもここだけはきちっとやっているだろうと思ったら、一部ホストクラブで保健所の許可を取らないで営業していたところがあったというとんでもない事実が発覚してしまいました。これは余談です。



●地域活性化プロジェクト

火災事故以来、まだ当時は決して安全とはいえなかったのですけれども、広報部長としてはとりあえずまちを売り出さなければいけなかったものですから、ワーナー・ブラザーズとかハリウッドのスターを呼んだりして、歌舞伎町はこんなに安全なまちですよということで、いろんなイベントをやりました。それがだんだんマスコミに載るようになって、こんなイベントをさせてくれということで、いろんなところから引き合いが来るようになりました。例えばファッションデザイナーの方から、自分のデザインを発表したいので場所を貸してくださいという依頼が来たりします。

話がちょっと戻りますが、先ほどお話ししたシネシティ広場は行政区画上道路なのです。当時東京の大学に通われていた方は覚えていらっしゃるでしょうか。ここには池があって、噴水があって、早慶戦があると早稲田の学生が飛び込んで水浴びをするというのが年2回の恒例行事になっていました。その後、そこを埋めて広場にしたのですが、そのころはどういう時代かというと、新宿騒乱事件が起こったり、昭和40年代は過激派の学生が反戦デモを繰り返していた時期です。広場というのは人がたむろできるのです。道路は人がたむろできない。ここはちょうどそういう反戦の学生たちのたむろ場所になっていたものですから、行政区画上道路にしてしまったのです。新宿駅の西口も、私が学生だった昭和40年のころは地下広場と呼んでいました。それが騒乱事件以来、地下通路になりました。

当時は通路と広場の違いがわからなかったのですが、通路といえば道路、広場というのは公共空間です。したがって規制が違います。道路はそこに物を置けません。イベントができません。道路ですから何もできないのです。シネシティ広場も広場のような格好をしているので勝手に広場と言ってしまったのですが、道路であるがゆえに、ここでイベントをやろうとすると新宿区から占用許可をもらい、警察から道路使用許可をもらう。警察から道路使用許可をもらうためには新宿区がそのイベントの後援に入らないとだめだとか、いろんなことを2年間繰り返しながら、そこは道路であるにもかかわらず広場と言い張っていろんなことをやっております。

ルネッサンスの中で新宿警察署はそういうことにも非常に協力的に対応していただけています。ただ、区はどうしても行政の縦割りというのでしょうか、言葉は悪いのですが小役人というのでしょうか、自分の持ち分のところでノーのことは絶対ノーなのです。例えば道路交通法でも何でもそうなのですが、第1条には目的という条文があって、目的が正しければ何をやってもいいことになっているのですけれども、細かいことを言って何でもノーにしてしまうのです。何でもノーにするということは、後で自分たちが責任をかぶりたくないということと、事故があったときにその責任を取りたくないということだけなのです。われわれは想定される事故を未然に防止するため、警察の方と細かい打ち合わせをしてイベントを行っております。

そんなイベントとして、おばけ屋敷は『サイレントヒル』というホラー映画のデモンストレーションでやりました。それから、東京六大学の応援団の応援合戦もここでやっております。東京六大学が神宮球場以外で応援するのは歌舞伎

町だけで、これもいろんな実績でそういうことになったのです。3万人が走った東京マラソンのときも、東京都のマラソン実行委員会ほうから、「何とか周りで盛り上げたいので、歌舞伎町さんも歌舞伎町らしい応援をしてください」と言われたものですから、ホストクラブのお兄さんとキャバクラのお姉さんを歌舞伎町の前に並べて、みんなで「頑張れ！」とやろうとしたのですが、それはだめだよと。というのは、費用の5分の4を補助してあげるからということだったものですから、ホストクラブのホストとキャバクラのお姉さんに助成金を出すわけにいかないので、歌舞伎町の正面がマラソンコースになりましたから、東京六大学の応援団のリーダーとブラスバンドとチアガールをそこに並べて、みんなで「頑張れ、頑張れ」と応援させていただきました。雨の中の応援になったものですから、今日は鼻声で恐縮です。

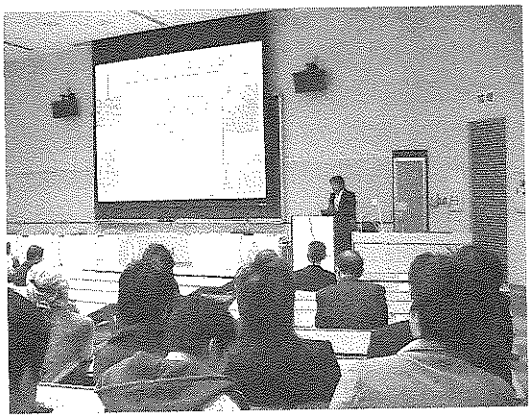
●商店街振興組合からタウンマネージメント（TMO）へ

いままでのような話を商店街振興組合としてはもうしきれなくなってきました。つまり、商店街振興組合というのは、商店街の個々のお店の繁栄のためだけが目的なのです。だから、まち全体をどうしようというのは商店街振興組合では規約上できないことがいっぱいあるのです。新宿区あるいは警察から補助金とか交付金が得られません。歌舞伎町にだけ認めてしまうと全部認めなくてはいけなくなってしまいます。そういう事情もありまして、エリアマネージメント、タウンマネージメントなる組織をつくって、そこが受け皿となって都や区、あるいは事業者から寄付金なり交付金なりをいただき、考えていることは、清掃事業とか、いま警察でやっているような駐車の取り締まりの業務、それから放置自転車の撤去業務などを、歌舞伎町だけを限定エリアにしてやる会社をつくろうとしております。それができれば、警察あるいは都や区と一貫委託の委託事業として契約できるわけです。清掃事業をやるからということで新宿区と契約して、年間数千万の事業料をもらって、自分たちでエリア内の路上を清掃するということを念頭に置いて考えています。

イメージしている最終型がニューヨークのＢＩＤです。ニューヨークのＢＩＤは防犯組織でもすべてパーフェクトな状態にあるのですけれども、そこはニューヨークの関連するエリアには固定資産税を上乗せして、その上乗せ分が直接ＢＩＤに入ってくる仕組みになっているのです。ところが、東京23区が非常に特殊な組織だというのは、税制が違いまして固定資産税が区に入らないのです。一回全部都に入って、都からの交付金という形になるのです。というのは新宿区と江戸川区では全然環境が違うのです。でも、東京都の行政としては同じに考えないとだめなものですから、新宿区と江戸川区を公平に運営するために、固定資産税をダイレクトに区が取るのではなくて、一回都で吸い上げて、例えば江戸川区には100％戻す、新宿区には20％戻すという組織です。中央区は銀座を持っていますからすごい額の固定資産税が入るところなのですが、区としての財政が豊かなものですから固定資産税にかかわる交付金はほとんどないそうです。もう一つの住民税は直接入ってきます。なぜかというと区議会議員が公選だからです。何か不思議な構図になっています。

ですから、ニューヨークのＢＩＤのように、例えば株式会社歌舞伎町という会社をこしらえて路上清掃業務をやるのだったら、固定資産税の一部をその資金に充てようということができません。したがって、事業をやるからというので、新宿区の一般会計予算の中で委託契約の議決をしてもらって契約をもらうという方法しかありません。それをどうやったら20年の4月に立ち上げられるかなということで、日々区とたたかっております。

もしタウンマネージメントができれば、いま申し上げたようなまちの維持管理、それから情報発信、いま私が1人でいろんなところを飛び回って「歌舞伎町は安心だから遊びに来てくださいね」と言っているのも、一つのシステムをつくって会社としてやっていこうと考えております。



●新宿繁華街犯罪組織排除協議会

最後になりますが、新宿繁華街犯罪組織排除協議会は、平成15年7月のビル火災の後に警察署の中にできた、何のことはない、行政がよく考えるただ名前だけの協議会でした。なおかつ、初めは頭に「新宿」ではなくて「歌舞伎町」とついた歌舞伎町犯罪組織排除協議会をつくってくださいと警察から言われて、当時の理事長が、「なんで歌舞伎町だけなんだ。駅周辺も全部一緒にしないと嫌だよ。おれたちは名前を貸してあげられないよ」ということで「新宿繁華街」という名前になりましたけれども、ただ協議会をつくっただけでした。

ですけれども、名前だけでも協議会ができていたものですから、暴力団と対決する姿勢を示そうということで、みかじめ料不払い委員会なるものをこの組織の中につくって、昨年の12月に活動を始めました。それはなぜかというと、まちづくりをするにしても何をするにしても、われわれがやろうとしたことができなかった理由が全部暴力団でした。私どもで3年間経験して、何をやったとしても最後にネックとなるのが暴力団とのかかわりでした。ですから、これからまちづくりをやられる方は、最初から暴力団のかかわりがあるよということからスタートすると3年分節約できると思います。

どういうことかというと、違法な営業をしているところは必ずみかじめ料を払っています。警察に通報するよりも暴力団に話をつけたほうが早いからです。暴力団はセールストークとして、「警察は110番したってすぐ来ないだろ。おれたちは5分で100人集めてやるからな」と言ってみかじめ料を取っていくのです。みかじめ料を取るということは、例えばお客さんとお店との間の金銭トラブル。確信犯のお店がお客さんからぼったくりをした。ぼったくられたお客さんが文句を言った。本当は文句を言ったほうが警察へ届け出をすればいいのですけれども、周りを囲ったりして届け出をさせないようにしてしまうのです。お店のほうは暴力団とつるんでいますから、暴力団員を呼んできて、そのお客さんを拉致して巻き上げるという構図です。これがキャッチバーで大学生がビルの屋上に逃げて飛び降りてしまったという事件につながってくるのですが、違法な営業をやっているお店をターゲットにして、「警察よりも暴力団のほうが話がしやすいんだよ」というセールストークで暴力団がまちに侵入してきます。

したがって、違法な営業をするからつけ込まれるので、違法な営業をしないという宣言を出しましょうということです。岐阜県警には組対係がどれぐらいいらっしゃるかわからないのですが、警視庁新宿警察署には700人のお巡りさんがいて、60人が組対課なのです。こんな組織はどこにもないということをつい先日知ったのですが、組対課の中にも薬係、ピストル係、外国人係、対策係等いろんな係があって、それぞれ細かく動いています。一目見ただけではどちらが暴力団かわからないような対策係のお巡りさんが、私服を着てまちの中をうろうろ歩いて情報をいっぱい集めています。

この前新宿署の署長さんが胸を張られていましたが、山口組と住吉会の発砲事件、抗争事件がありましたが、あの30分後には、歌舞伎町にある40の住吉の事務所と、発砲された山口組系の太田会、池袋の太田会の事務所に発砲があったのですが、そこの本部は歌舞伎町なのです。歌舞伎町の山口組系太田会の事務所5〜6ヵ所と、住吉系の40ヵ所は、発砲事件の第一報から30分後に、全部の事務所の前を新宿署のお巡りさんが固めました。したがって、あの抗争事件にかかわる事件は歌舞伎町発では1件もなかったのです。

これの何がすごいかといいますと、もちろん新宿署や警視庁の取り組みがすごかったというのもあるのですが、どこにどういう組の事務所があるかということは、犯罪組織排除協議会のメンバーの人たちの毎日の目の光らせ方なのです。お巡りさんはどこに事務所があるかというのはわからないです。「うちのマンションの隣の部屋に、ちょっと怪しい人が出入りしているんだけど」というのが情報なのです。あるいはビルのオーナーの人からの、「契約と全然違うところが入ってきて、どうも暴力団の出入りがあるみたいだからちょっと調べてよ」という情報が一番大切なのです。

したがって、私ども民間の排除協議会のメンバーの方々の情報によって、新宿署管内には200の組事務所があり2,000人の構成員がいるということが新宿警察署ではきちんと出ています。したがって、新宿署の組対課の中へ入ると、住吉系が黄色、極東系が赤、山口組系がブルーというふうに色分けした暴力団マップがあるのです。山口組系は事務所を持たないで、ラーメン店か何かに形を変えて進出してきているのです。これがいま問題で、商店街としては行列のできるラーメン店はありなのです。菱形の大紋を店の看板にぶら下げているわけではありませんし、スープを飲み干すとどんぶりの底に菱形が浮き出てくるということもないし、ラーメンはおいしいのです。けれども、1杯800円のラーメンのうち50円か100円ぐらいは山口組へ上納されているのですね。これをどう考えたらいいのかというのが悩みなのです。われわれはそのラーメン店はありなのです。でも山口組の関連というのはノーなのです。

これをどうしたらいいのかというのがこれからのネックでございまして、岐阜というのはどういう勢力分布なのかお聞きしたいと思うのですが、関東系のやくざは互助会なのです。住吉、極東、稲川はみんなお互いに協力し合っているのです。女をとったとらないの痴話話からの射殺事件みたいな抗争事件はたまにあるのですが、縄張り争いについてはそんなにないのです。ちゃんと話し合いをつけてしまいます。これが関東系のやくざです。

山口組はテリトリーを持たないそうです。歌舞伎町の場合は住吉の地盤で極東が商売をしているという構図になっています。そこはきちんと整理されているのです。ですからあまり表に出てきません。確かに組事務所はありますが、暴対法の強化によって、地回りといって、やくざの格好をした人間が5人も6人もつるんで歩いていると処罰を受けます。

それから、先ほど歌舞伎町を一丁目、二丁目と区分けしましたけれども、そのちょうど境い目のところに通りがあって、そこには高級外車がズラーッと止っていました。新宿署の対応で、歩道を拡幅して車道を狭くすることで違法駐車を少なくしようということで工事を進めておりますけれども、警察の意向によって区が金を出してくれました。非常に画期的な話です。また、暴力団の車が駐車している場合は、交通課の交通違反ではなくて、暴対係の中止命令になっています。これもすごいことだと思います。それぐらいやろうと思えばできるのです。

ただ、警察とはいえ垣根がいっぱいあります。組対警察が一生懸命暴力団をあぶり出しているのですけれども、あぶり出てきた違法な店をつぶすのは生安警察、生安課なのです。そうすると、生安課長に言わせると、組対課長に対して、「おまえらが余計なことをするから私たちの仕事が増えた」ということになります。それは2人の間の雑談の中で言い合っていますから非常にいい構図があると思いますが、ほかのところだったらどうでしょうか。課が違うと全然対応が違ってしまいます。駐車違反は交通課のお巡りさんしかしないのです。地域課の交番のお巡りさんはなかなかしないのですが、歌舞伎町の交番のお巡りさんは40人ぐらいいらっしゃいますけれども、全部やってくれています。それぐらい一枚岩になって警察が本気になってやってくれればできます。

ただ、警察が本気になってやってくれるように一緒にやるのは地元なのです。地元の人はいままで、自分たちは何もしないで、警察のせいだばかり言っていたから変わらなかったのです。

一緒になって対策を講じればできます。これは警察との間だけです。区は一緒になってできません。いままでけんかばかりしています。書類を放り投げて机をひっくり返して帰ってきたことが何度かあります。なぜかというと、警察の方は命を張っているのです。そして正義感が強い。ですから、しっかりとした話をお互いにしていけば、まちの話はわかってくれます。われわれも彼らが命を張ってやってくれているということを肌で感じます。そういう場面をいっぱいつくってあげましたところ、というのは、たまたまそういう機会が増えています。まちの人たちと警察の関係の方との接点が数多くあるものですから、そういう席上でいろんな話が出ますとお互いにわかり合えます。方向性は一緒です。

ですから、私どもの組合の役員の方々が中心なのですけれども、先ほどの44名のビル火災事故では自分たちも被害者だったというのは最近なくなってきました。「警察がやってくれなかったんじゃなくて、自分たちも何もやらなかったからだよね」というふうに少しずつ変わってきています。いまでは非常にいい関係でお互いに情報交換しあいながら、うちのビルの上には暴力団がいそうだよという情報も伝わるようになっていますし、みかじめ料不払い運動による成果も出てきています。

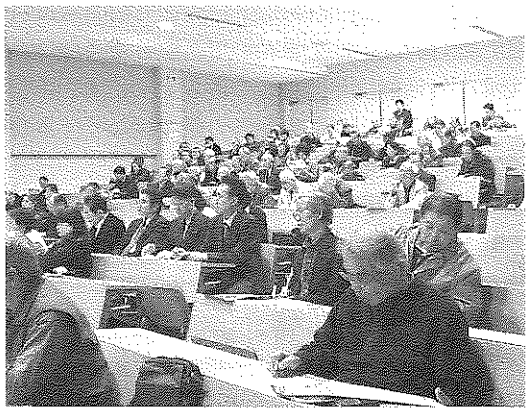
ただ、このみかじめ料不払い運動の反作用として、先ほどのカラオケの客引きではないのですが、従来は生安課的営業は違法営業ではない、風適法に規制される営業ではないという判断をしていたのだけれども、暴力団のかかわっている弁護士に突かれて、深夜酒類提供の届け出を出してないじゃないかと言われると、出していなければ、そうだよねということになって、いろんなところに細かい問題が生じてきますけれども、カラオケ店を営んでいる方々も歌舞伎町が好きだから歌舞伎町で商売をやっている。われわれもそうです。それから、お客さんも歌舞伎町が好きだからまちに来るのだから、まちを好きな人たちが一緒になって自分たちでつくったルールは認めてくれています。認めないのは暴力団だけなのです。暴力団がラーメン屋さんで出てきてしまったので、これをどう考えたらいいのかというのが次の問題になっていますが、このへんのところをこれからの課題として、商店街振興組合でできなかったことをエリアマネージメント(TMO)としてやっていこうというのがこれからの課題でございます。

歌舞伎町というのは安全安心。安全安心という言葉を使うと、パテント料を明大前商店街に払わなければいけませんのであまり使えないのですが、歌舞伎町は大人のまちです。本物のまちです。暴力団でもエセ暴力団ではなくて本物がいます。たちの悪いのはにせもののチンピラ風のほうです。きょうび暴力団といっても就職が厳しいらしくて、暴対法によって組員の不始末は組長が責任をとることになっていますから、組長にしたってそんなに不逞な組員は使えませんので、チンピラは使いません。だから、暴力団にもなれないチンピラのほうがたちが悪いのですが、そういうのはいません。いるのは本物の組員と本物の暴力団ですから、これは安心していられるのです。

自分が白くて正しければ暴力団は絶対に手を出してきません。それは自分でも感じています。「怖い目にあうんじゃないの？」とよく言われるのですが、自分は白いという自信を持っていますし、事実手を出してきません。まちを歩いていて背中をポンポンとたたかれて振り向いたら、本当に暴力団っぽい人から「頑張ってるね」と言われてしまいました。彼らは自分たちのやっていることがわかっているのです。彼らは楽をして金もうけをしたいですからいろんなことを考えてきていますけれども、まちとして排除したいという意志があればそれは通じます。これは自信を持って言えると思います。

ただ、確信犯的に違法な営業をしていると暴力団につけ入るすきを与えてしまいますので、そこからどんどん侵食されてしまいます。よその繁華街と違って誘惑もありますし、女性の方がいらっしゃいましたら、先ほど言いましたように、21の優良なホストクラブがございますのでご案内をさせていただきます。たぶんはまる

と思います。1回目はただです。2回目はお1人様ワンセットで5,000円です。そこから先は知りませんけれども、そこまではご案内できます。

すべての業態が悪いとはいえません。いろんな楽しいまちにしていきたいと思いますので、大人のまち、安心なまちになりました歌舞伎町へぜひ足を運んでみてください。

長々とありがとうございました。